

シンガポールでのアジア太平洋ガス・LNG 市場の課題に関する議論

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
常務理事 首席研究員
小山 堅

11 月 28 日、シンガポールにおいて、「Natural Gas and LNG Market Dynamics in Asia and the Pacific Region」と題する会議が開催された。表題の通り、この会議は、アジア太平洋地域の天然ガス及び LNG 市場の将来のダイナミックな成長や変化に焦点を当てた議論を行うもので、世界エネルギー会議の Global Gas Center、シンガポール国立大学の Energy Studies Institute、シドニー技術大学の Australia-China Relations Institute、国際エネルギーフォーラムの 4 者共催で開催されたものである。

本会議には、主にアジア諸国から、LNG 産業関係者、アカデミア、専門家・有識者等が約 60 名参加し、需要サイド、供給サイド、市場のダイナミクス・競争・エネルギー転換、エネルギー政策の 4 つの視点に基づいたセッションで、活発な議論が行われた。筆者は冒頭の基調講演で、アジアの天然ガス・LNG 市場の成長に対する期待と課題に関して、弊所の IEEJ Outlook 2020 に基づいた、概括的な報告を行った。以下では、本会議の議論の中で、筆者にとって特に印象に残ったポイントを整理する。

アジアが世界のエネルギー需要増加の牽引車となり、需要面で世界の重心がアジアにシフトしていくことに関して、世界的にほぼ共通認識が形成されている。その状況下、ガス及び LNG についても、アジア市場の重要性がますます高まることに関係者の見方はほぼ一致している。現実に、ここ数年、アジアにおけるガス・LNG 需要は大幅な成長を示しており、今後も成長が続くこと自体は確実である。問題は、その成長のスピードと度合いである。それは、需要拡大のスピード・度合いと、供給拡大のその兼ね合い次第で、アジアのガス・LNG 需給状況やそれに応じた市場における構造的な変化が、大きく影響を受けるからである。例えば、今回の会議では、アジアのスポット LNG 価格が低迷している状況やその背景や今後の展開、さらにはその影響に関して、様々な意見が示されたが、価格低迷の原因は、需要そのものは拡大しているにもかかわらず、その伸びが供給拡大を下回って、需給緩和が市場の基調になっていることにある。

先に述べた通り、アジアのガス・LNG 需要の拡大の方向性そのものに疑義を挟む意見はあまりない。しかし、そのスピード・度合いについては、大きな影響を及ぼす要因が多数存在する。筆者は、基調講演において、経済成長の速度、環境規制の強度、価格アフォーダビリティ、石炭・原子力・再生可能エネルギー・LPG など石油製品等との競合、市場自由化・規制緩和の影響、パイプラインガスと LNG 間の競争等の要因が重要な影響を及ぼすと指摘した。特に、筆者はアジアの LNG 需要について、IEEJ Outlook 2020 における価格感度分析結果に基づき、現状の LNG スポット価格並みの「低価格」を前提とすれば、基準ケース（約 10 ドル/100 万 BTU を前提）より、2050 年時点で需要が約 6 割も増加し、アジアのエネルギートリレンマ改善に貢献すると指摘した。これに関しては、その価格前提の考え方や、その意味について活発な質問・意見が寄せられるなど、会議参加者から大きな関心が示された。もちろん、現実の市場における問題は複雑で、現状並みのスポット LNG 価格で、需要成長を賄うだけの大規模投資を今後実現できるのか等が大きな課題となる。

その意味では、LNGの需要と供給の健全な拡大を両立させるような条件をどのように模索していくのか、が今後のアジア市場において、関係者全体にとっての共通課題となろう。

第2に、今回の会議でも、中国市場の将来に関する活発な議論が行われ、関係者の高い関心が示されたことを指摘したい。長期的には、インドやASEANなどの新興市場に需要増加の中心がシフトしていくにせよ、いまや世界第2位のLNG輸入国に成長し、現在も需要・輸入拡大が続く中国市場の行方に関心が集まるのは、いわば当然でもある。特にLNG市場関係者にとっては、中国の輸入がどれだけ拡大するのかが、アジア市場の需要サイドにおいては最大の関心事項であるといつて差し支えない。しかし、今回の議論では、中国の今後のLNG輸入に影響を及ぼす、多様で複雑な要因の存在が指摘される結果となった。経済成長や環境規制といったマクロ的な要因から、ガス市場の需給構造に関わる要因、すなわち、国内ガス生産、パイプラインガス輸入、ひいては中国政府によるガス市場改革の取組み、などが指摘されたのである。

また、2017年冬季の大幅なLNG輸入拡大がLNGスポット市場の需給逼迫を招き、結果としてスポットLNG価格高騰で自らを苦しめることになった中国が、様々な政策・戦略対応をしていこうとしていることが改めて示されたことも印象的であった。その一つの象徴的な議論が、天然ガスの地下備蓄を充実・活用しようとする考えが強調されたことである。LNG輸入についても、この在庫・備蓄整備を活用して、より経済合理的な調達を図ろうとする姿勢が示されたことは興味深かった。中国は既に石油輸入依存度が7割近くに達しているが、ガスの輸入依存度も4割近くまで上昇している。在庫・備蓄の活用は、中国にとってのガス供給セキュリティ向上にも資するだけに、中国政府によって今後一層重視されていく可能性があり、今後の取組みがこの面からも注目される。

第3に、ガス・LNGとの競合という観点で、石炭と再生可能エネルギーについて、本会議では特に多くの意見や質問が寄せられ、極めて高い関心が改めて示されたことを挙げたい。欧州のように、ガスについても「脱炭素化」が求められる状況になると、ガスを取り巻く市場環境は大きく変わる。しかし、成長が期待されるアジアでは、まずは「脱炭素化」の前に、「低炭素化」と「クリーン化」が環境問題の優先課題となる。同時に、成長を支えるため、また低所得層を保護するため、価格アフォーダビリティの問題も現実存在する。

この状況の中で、ガス・LNGの成長が期待されているが、対石炭に関しては、ガスへの転換によって低炭素化・クリーン化には資するものの、価格アフォーダビリティに関しては課題が生じる。もちろん、ガス・LNGの価格競争力が大きく向上すれば、この問題は解決するが、現実には競争力向上は決して容易ではない。また、対再生可能エネルギーに関しては、その供給間歇性に対応するため、ガス・LNGは「ベストマッチ」のエネルギーとして共に拡大するのか、それとも競合しあうのか、という論点での活発な議論が行われたことも興味深かった。また、再生可能エネルギーが大量に導入されるようになると、競争的な電力市場では「メリットオーダー」のため、ガス火力発電所の経済性が悪化し、ガス需要に負の影響が示されることを指摘する議論もあり、ガスと再生可能エネルギーの関係についても様々な複雑な要素・状況が存在することが浮き彫りとなった。

ガス・LNGにはエネルギーとして様々な優位性があることは間違いない。ただし、他の全てのエネルギー源と同様に、「完璧なエネルギー」ではない。ベストエネルギーミックス追求の基本的立場に立って、その弱点克服を図りながら、今後の一層の利用拡大を促進していくことがアジア全体にとっての課題である。

以上